

経営コンサルタントの 氏が駆け出しの頃、顧問先の社長より「今晚うちの店に、売れっ子のE氏が来店されますので、時間がありませんらお越しくださいませんか」と電話が入りました。

氏は時の人であるE氏に関心があったため、二つ返事で出席する旨を伝え、約束の時間に訪ねていきました。顧問先の中華料理店の一室に、E氏とその秘書を交えた六名で丸テーブルを囲み、夕食会が始まりました。当日のゲストであるE氏を中心に料理が出されます。

まずE氏が箸をとり、時計回りに料理が動いていきます。何品目かに、カニの爪のコロツケが出てきました。白い皿に六個のコロツケが盛り付けられています。E氏は素早く箸を向け、三個のコロツケを自分の皿に移しました。その瞬間、言葉にならない空気が室内を覆ったのです。誰が見ても「ひとり一個」の割り当てです。

テーブル上の皿には三個のコロツケ、取り手はまだ五人も残っています。E氏の隣の秘書は困惑してしまい、箸がなかなか出ません。他の人もいったい誰が残りのコロツケに手を出すか、興味津々の状態でした。

氏は三個のコロツケを自分ひとりで取ったE氏の行為を目にして、この男は計画能力があるのだからかと、その頭の構造を疑い、同時に 何と自分勝手にわがままな人間なのだろうと猛烈に腹が立ち、噂どりの人物だな と思ったのです。

当時世間では、E氏の言動について 若いのに横柄で、業界のルールを無視し、傍若無

## 六分の三のコロツケ



え・牧えみこ

人に振舞っている など取り沙汰されていたのです。

しかし、しばらくするとO氏は、「さすがにこの人物はスケールが大きいな」と感心したのです。常識的に考えれば、誰が見てもひとり一個のコロツケということは明確です。おそらくE氏もそれはわかっていたはずですが、それでも自分が好きなものであったため、思い切った行動に出たのです。

たしかに常識的な立ち居振る舞いは大切ですが、自分ひとりで生きているのではないのですから、互いに相手の立場を尊重して、その場の空気を読みながら事を進めることは当然ながら必要です。しかし、時にはそのバランスを突き崩す勇氣も必要なのです。

未曾有の金融不況の真つ只中にある現在、今までと同じ考えや手法で乗り切っていくことはできないと、経営者であれば誰しも感じているはずですが、しかし変革しようとしても、一歩を踏み出す勇氣を持たない、変わったことを始めると周りから中傷されるのではないかと、失敗したら叩かれるのではないかと、後ろ向きな状態にあるのではないのでしょうか。先行きに不安を感じつつも、今までの枠組みの中に安住を求めているのが、多くの経営者の姿でしょう。

今まで正しいと信じていたこと、これ以外に方法がないと思いついていたことを、あらゆる角度から調査し検討し直す時なのかもしれません。

生き残りをかけて一歩踏み出すことから、新しい道が拓けていくのです。